

# 見通しをもっていろいろな活動に意欲的に取り組み、 最後までやりぬく子

白 水 幸 子

## はじめに

からだを使う経験の乏しさから、知的能力に比べ生活能力が極度に劣り立ちつくしているR男。そのR男が生活単元学習を通してからだを使う楽しさを覚え、未経験のためにできなかったことが一つずつできるようになり、自信をつけ、いろいろなことに意欲的に取り組もうとするようになった。その実践の経過について述べていきたい。

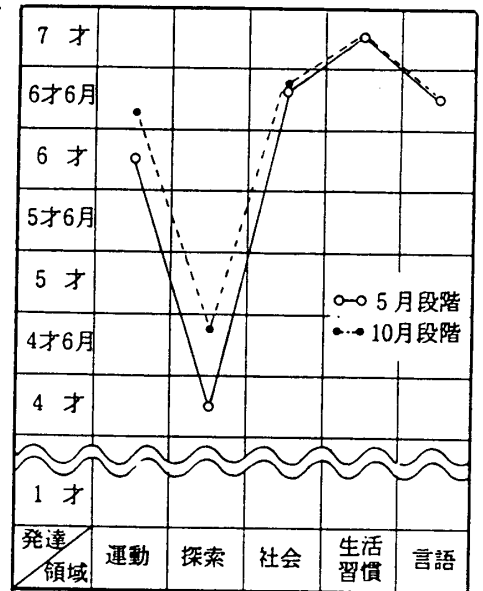
## 1. 対象児のプロフィール（平成元年5月現在）

### (1) 生育歴の概要

- S. 51. 8. 31生 12才9月 男子 ひとりっ子 熟産 鉗子分娩 出生時体重 2,900g 出生時に仮死状態2回、保育器に入る。首のすわり3か月 歩き始め24か月
- 保育所4年 市内小学校（心障児学級）5年 T養護学校（病虚弱）1年を経て中学部に入学
- 脳性小児麻痺後遺症 S. 63 アキレス腱延長手術

### (2) 実 態

- 津守式乳幼児精神発達検査では発達年令6才程度。遊びや生活経験が乏しいために探索の面で劣り、生活習慣においては技能的に十分でないものが多い。
- p.53に示すMEPAでは7ステージ（5～6才）が中心であるが、脳性麻痺の後遺症から運動・感覚のうち姿勢移動の分野で劣る。同じp.53に示すからだの輪郭表では全体的に5才まで到達している。しかし道具やひもの操作といった手指の機能、生活経験に関わる面で劣っている。言語は8才程度に到達している。



### (3) 行動特性

- 明るく素直であるが根気強さに欠ける。未経験による自信のなさから自主性に欠ける面がある。
- 学部の集団の中でどのように動いていいかわからず、傍観していることがある。
- 計算力、漢字力はある。読解は苦手で内容の読み取りが不十分である。
- 右手麻痺のために造形活動を苦手とし、衣服の着脱等に時間のかかることが多い。右手を使いたがらず、ハンガーに服をかける、シャツをズボンの中に入れる等、簡単なことができない。

〔図1〕津守式乳幼児精神発達検査

## 2. 指導仮説と指導の方針

R男のもっている基礎的な力（言語、数量）を背景に、友達と関わりのある実生活の中で目的に即しながらからだを動かすことを経験させることは、R男に大きな自信を与え、見通しをもって行動する意欲、最後まで取り組む力を育てていくと考え、指導の方針として次の三点を設定した。

- ① 楽しい生活を通して、未経験のことにも恐れず関わっていかせ、経験の拡大を図る。
- ② いろいろな手だてをしながら、自分なりに見通しや目標、だんどりをつける力を育てる。
- ③ 友達と関わる場面を大切に、友達と協力したり、競争したりする喜びをもたせる。

## 3. 指導の重点

指導仮説、方針に従って、以下のような場面において重点目標をたてた。

- 日常生活の指導……………一日の日課やスケジュールに沿って見通しをもたせる。全身を使ったルールのある遊びや運動を楽しみ、遊びの内容を広げる。
- 生活単元学習……………遊び的労働を中心にしたいろいろな活動を通して経験の拡大を図る。その中で一つずつ自分のできなかったことができるようになった喜びを味わわせる。自分なりに見通しやめあてをもって率先して活動できる喜びをもたせ、集団に意欲的に関わっていかせる。
- 教科別の指導（体育）……………粗大運動を中心とした運動を力いっぱい経験させる。また、ルールのある簡易ゲームに見通しやめあてをもって楽しく取り組ませる。
- 作業学習……………指示を受け最後まで根気よくやり遂げさせ、繰り返しの中で見通しや自己目標を立てて取り組ませる。

以下、この中でもR男に時期的に最も適した指導形態であった生活単元学習の取り組みを述べる。

## 4. 指導の実際（生活単元学習を中心に）

### (1) 生活単元「野外炊飯」の実践

野外炊飯に向けての準備・練習をする中に同じような題材を繰り返し設定することで、活動に見通しをもたせ、自己評価においてR男自身が自分の成長を認められるようにした。

#### ① 野外炊飯（調理活動）におけるR男の様子

題 材	R 男 の 様 子 （ 見 通 し 、 だ ん どり ）	技 能 ・ そ の 他
6/5 野外で調理をしよう（合同）	何をどう手伝ってよいのかわからず、他の子の活動の中で、ただ立っている。言葉かけをされても具体的に何をするかわからない。	材料を洗う、切る、用具の準備等一切できなかった。
6/7 インスタントラーメンづくり	何をするのも初めてで自信がなくオドオドしている。かまどにのせる鍋の大きさの見当がつかず4回往復して実際にのせて選ぶ。	水をくみに何も持たずに農園の水道まで行く。
6/16 カレーライスづくり	まき係（火の番）はどうすればよいのかわからず、火が消えかけていてもまきを足そうとはせず、かまどの前に立っている。片付けは見通しがたっておりよく活動する。残菜の始末は前回の経験	マッチがすれない。 スコップを使って深く掘れ

	で、穴を掘って埋めることがわかり指示がなくてもスコップを持ってくる。ブロック（かまど）運搬は最後まで一人でやり通す。	ない。 ネコ車の操作が出来ます。
6/20 野外炊飯	見通しがたち、セッティングをどんどんやっていく。まき係に専念し、火にまきを足すことがわかる。飯ごうを返すのに時間がかかる。カレーの袋が破れず庖丁を使って端を切って取り出す。	紙をねじって火をつけることがわかる。御飯の炊き具合がわからない。
6/28 招待炊飯	場のセッティングが指示がなくてもできる。飯ごうで御飯を炊くのに自信がついてきた。火の始末に水をかけることがわかりいつのまにかボールに水を入れて準備している。	マッチで火をつけることが出来ます。

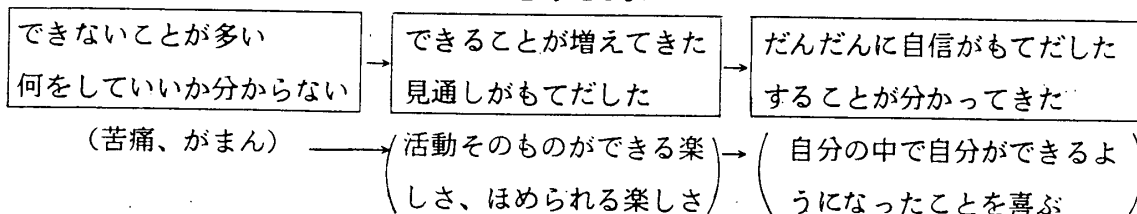
## ② 「野外炊飯」をふりかえって

何をしたいのかわからずとまどっていたR男であった。野外炊飯を始めた頃はオドオドしており、この単元は苦痛と疲労の連続ではなかったかと思われる。しかし、後半では自分なりに見通しが立つようになり、少しの指示で積極的に活動することができるようになった。また、まきづくり、コップづくり、椅子づくり等におけるのこぎりの使用、炊飯場づ



【かまどの番をするR男】

くりにおけるネコ車の操作、マッチを使って火をおこすこと等々、技能的にも力がつき、それがR男自身にもはっきり自覚されて自信につながってきた。これら野外炊飯の諸活動におけるR男の変容は次のようにまとめることができる。と考える。



## (2) 生活単元「臨海学校」の実践

野外炊飯で生活単元学習の楽しさがわかってきたR男に、楽しい行事への参加を通して、更に経験の拡大を図り、活動の見通しがどこまで立てられるのか「砂の造形」活動を通して迫ってみた。なお、R男は発達検査をした段階では、砂で山や川をつくって遊ぶことが未経験でできていない。

### ① 砂の造形におけるR男の様子

題 材	手 だ て	R 男 の 様 子
7/5 砂場づくり	指示を与えず砂で遊ばせる。 ネコ車を使って砂運びをさせる。	砂山に登り、上級生が作った道にボールを転がして遊ぶ。力強さはないが最後まで働く。その後、休憩時には誰に言われなくても砂場で砂運びをしている。
7/6 山や池をつくろう	あまり指示を与えず、何をつくるか生徒にまかせる。	山や池をつくることに決まったが、どう関わってよいのかわからず友達をまねて常に動いており、1か所にとどまることがない。
7/10 クジラをつくろう	事前に話し合いをし、小黒板にクジラの絵を描いて砂場まで持って出る。	話し合いで何をつくるのか意見を言うことができない。クジラをつくとわかっていながら友達が先に動かないと立ちつくしてしまう。スコップを使って山をつくろうとする。

7/4 船をつくらう(1)	何をつくるのか事前に話し合った後、自分達で船の絵を描く。発泡スチロールを使って事前に小さな船を各自つくらせる。	先生や友達のまねをしてつくる。スコップを使って山をつくる。その後、指示されなくても船を堅く固めようと手で船をバンバンたたき続ける。道具の準備、片付けは指示がなくても行う。
7/7 船をつくらう(2)	前回つくったものと全く同じものを海岸でつくらせる。直接指示は与えない。	一度つくった経験があり、前回の船と全く同じ活動を指示されずにする。(スコップで砂を掘って山をつくること、手で砂を固めること。

## ② 「臨海学校」をふりかえって

臨海学校の経験がなく行事全体への見通しがなかなかもてなかったが、準備やだしもの練習等、その場その場では見通しをもって楽しく取り組んできた。砂の造形では、経験に乏しくどうすればいいのか分からず、まず自分にできること(ネコ車で砂を運ぶ)から始め、それを繰り返し行っていたが、友達の様子をまねて取り組むうちに、少しずつ見通しがたつようになり意欲を見せるようになった。



〔スコップで砂を掘るR男〕

## 5. 結果と考察

二つの大きな生活単元を経た後の、9月の生活単元「秋の運動会」では、学級集団から縦割り集団へと集団の質が変わったにもかかわらず、自分にできることに精一杯取り組んでいる。学部を二つに分けたチーム対抗の練習ではキャプテンとして集合を呼びかけたり大声で声援したりと、率先してチームをまとめようとする態度が見られた。これまで、淡々として自分のできなかったことが一つずつできるようになったことを喜んでいたが、相手を意識し、競争しよう、協力しようとする面が顕著に出てきた。

R男の津守式発達検査の探索での落ち込みは、以上の取り組みの中で実際にからだを動かす生活経験の乏しさからくる擬似的な姿であったことが明らかになった。それを裏づけるようにp.72の図1の津守式発達検査で示すように、探索の面での伸び率が一番高い。

## 6. 今後の課題

R男の発達年齢は7才であり(田中ビネー)、見通しと段どりの力をつけていく段階にある。今後も本研究の取り組みは継続していきたい、また、文字数量的な能力を行動と結びつけ、書くことで自分を客観視する8才の課題へと導きたい。一方、脳性麻痺後遺症のリハビリを特設養訓の取り組みと並行して行い、右足の機能の改善を図り、更に自分の行動に自信をつけさせたいと考える。

R男の家庭は知識面での指導を重視してきたが、教官との共通理解のもと、家族ぐるみで地域や社会の活動に参加しようとする姿勢が出てきている。家族の一員としての役割をもつことで、R男の生活への意欲が増すことが考えられ、この取り組みも継続して行っていきたいと考える。